

『源氏物語「本文と享受」の方法』解題・論文要旨

岩 下 光 雄

本書は筆者の還暦記念論文集として、平成四年十二月、和泉書院から刊行された。

『源氏物語の形態』（武田祐吉博士序 昭・31年11月 山王書房）

『源氏物語論』（昭・42年10月 佐紀社）

『平安時代物語論』（黒田優子と共著・昭・51年2月 佐紀社）

『源氏物語とその周辺』（三谷栄一博士序 昭・54年12月 伊那毎日新聞社）

『源氏物語の本文と享受』（昭・61年10月 和泉書院）

などに次ぐ筆者の第六論文集である。増補、訂正を加えてはいるが、所収論文の初出一覧を示すと次のごとくである。

第一章 『首書源氏物語』玉鬘の巻の本文と物語の享受・（『源氏物語「本文と享受」の方法 二、『首書源氏物語』玉鬘の巻の本文と物語の享受）「信州豊南女子短期大学紀要」第五号所収 昭・63・3・1）

第二章 『首書源氏物語玉鬘の巻の本文と物語の享受 再論・本書のために新しく執筆した。

第三章 「面影」の語誌と物語の享受・（『源氏物語「本文と享受」の方法 一、「面影」の語誌と物語の享受」

「信州豊南女子短期大学紀要」第五号所収 昭・63・3・1）

第四章 「夕顔の巻疏注」・補遺・

- 一、「源氏物語の本文と享受」要旨・享受をめぐる論・（「源氏物語」本文と享受の方法 三、「源氏物語の本文と享受」（和泉書院）要旨・享受をめぐる問題」信州豊南女子短期大学紀要」第六号所収 平・1・3・1）
 - 二、「夕顔」の話し型と人物像をめぐる論・（森一郎先生編『源氏物語人物論集』所収「夕顔」の話し型と人物論へのアプローチ」勉強社 平411月刊行予定）
 - 三、「おのがいとめでたしと」再論・（平1・10・22・中古文学会秋季大会で発表・「源氏物語」本文と教授の方法（Ⅲ）付1・「おのがいとめでたしと」再論」信州豊南女子短期大学紀要」第七号所収 平・2・3・1・）
 - 四、「つれづれ」の語をめぐる論・（平1・7・26・長野県上伊那老人大学で「文学と人生」と題して講演したものの一部・「源氏物語」本文と享受」の方法（Ⅲ）付2・Ⅲ「つれづれ」の語をめぐる論」信州豊南女子短期大学紀要」第七号所収 平・2・3・1・）
 - 第五章 宿木の巻疏注——「心ときめき」「顕証」などの語をめぐる論——・（「源氏物語」本文と享受」の方法（Ⅴ）四、宿木の巻疏注」信州豊南女子短期大学紀要」第九号所収 平・4・3・1・）
 - 第六章 『伊勢物語』の方法と『源氏物語』の享受——第一段・第二段をめぐる——・（「源氏物語」本文と享受」の方法（Ⅳ）付3・『伊勢物語』の方法と『源氏物語』の享受——第一段・第二段をめぐる——」信州豊南女子短期大学紀要」第八号所収 平・3・3・1・）
- 和泉書院「1993年度（平5年度）用・教科書目録・1992年度 新刊・近刊案内」に、次のように紹介されている。
- 武田祐吉博士記念賞の「源氏物語とその周辺」（昭54・12・伊那毎日新聞社）。それに続く「源氏物語の本文と享受」（昭61・10・和泉書院）。本書はさらにその後の五か年に亘る研究成果をまとめた論文集。文献学、民俗学、国

語学的研究方法を駆使し、河内本、別本の側に平安時代の本文的証跡と、新しい解釈的本文の混在を指摘しながら、常に源氏物語の「本文と享受」の世界を見つめ、新たな「源氏読み」を提唱してきた著者が、さらに「本文と享受」の方法を樹立しようとして、従来の「読み」を再検討する。夕顔、玉鬘、浮舟論を主軸に、あるいは序章に据え、「異本文学論」への道標を模索しようとする意図的な試みをも含む六章から成る論文を集成。精力的に「本文と享受」の問題にとり組んできた著者が、個々の問題の核心に迫ろうとして、あえてアプローチを試みた気鋭の「第六論文集」でもある。

次に第一章から順を追って、論文の要旨を要約し論述する。

第一章 『首書源氏物語』玉鬘の巻の本文と物語の享受

I

『首書』本玉鬘の巻が、『大成』底本の大島本と異なる異文を持つもので、管見にはいったものは百四十四例であった。大島本の独自異文が四例あるが、諸本間に異なるものと判定されるものに限って、百四十四例の中に加えた。うち『首書』本の独自異文数は十例で、他の諸本と共通異文を形成するものは百三十四例である。『湖月抄』と単独で共通異文を形成するもの二十三例、他の諸本を伴って共通異文を形成するもの八十九例、計百十二例で、『湖月抄』と関係のない異文数は二十二例に過ぎない。それらを分類、検討を加えた。『首書』本の異文が、校合に用いた二十本と共通異文を形成する場合の大きな特徴は、共通異文のあらわれ方が九十四種類に達するという点である。『首書』本と『湖月

抄」との親近度は八三・六％に達するが、『首書』本の独自異文率は七・五％に過ぎない。これらの事実は、『首書』本の本文が、校訂にかかわる混成、混態を経た系統論的にきわめて不純なものであることを示している。

『湖月抄』本文とは無関係に、他の諸本と共通異文を形成する二十二例の異文と頭注、傍注として異本について注記し、異文をあげている十三例の異文について調査した結果からも、『首書』本の、そうした本文的性格と一致している。『湖月抄』の異文注記との相違——混成・混態を経た系統論的に不純な本文を持ちながらも、不整でない点に、やはり伝来上の素性のよさを見せている——それは、両本の校訂者の社会的地位、物語享受の方法、享受の階層などの微妙な差異を端的に示しているように思われる。

『首書』の頭注に引かれた諸注の出数を集計すると、次のようになる。(1)細流抄・192 (2)万水一露・133 (3)或抄・

130 (4)花鳥余情・116 (5)河海抄・50 (6)紹巴抄・39 (7)弄花抄・35 (8)孟津抄・20

これらの出数は、やはり源氏学の学統に深くかわるものであるが、物語の内容に対応して、微妙に注釈書の引用に変化があらわれること、引用の方法がほぼ群を形成していることなどが注意される。細流抄を軸にして、万水一露、或抄の側に引用の比重がかけられてくると、河海抄、花鳥余情の側の引用が減少していく。紹巴抄、孟津抄の同一頁に重複して引用されているのは五例に過ぎず、あい補う形態で、しかも群を構成して引用されている。これは物理的に限られた紙面に注記を収めなければならないという事情以外に、別の意識が働いていたからだと思われる。片桐洋一氏は、このシリーズの『総論・桐壺』の解説で、他注よりも「或抄」が最も多く引用されているのは、「作品の文学的鑑賞を何よりも重視する「首書源氏」の姿勢と一致する」と指摘されているが、注釈書の選択、注記のなかにも、やはりそういう姿勢や意図を読みとることができるように思う。出典考証という面から、そうした面をからませながら、文意文脈を理解しようとする面から、というように、諸注の個性を生かしながら、わかり

やすさを中心にして適宜、簡潔に引いていく。そこには、湖月抄のように、諸注の簡略化と集大成という方向とは、また別の読みが見られるのではないだろうか。きわめてストレートに、よりわかりやすく、直接的に問いかけてくる源氏物語の読みである。(『首書源氏物語玉鬘』岩下光雄編・和泉書院・128頁)

確かに「或抄」は、野村氏が指摘されるように、「二竿斎じしんの考えを記した書物ないしノート」に近いものであったと考えた方がよいように思う。伊井春樹氏(『源氏物語注釈史の研究』桜楓社)は「花鳥余情」は兼良の作成した源氏物語の注釈書ではあるが、だからといってすべてが彼のオリジナナルな発想によってできあがった注記だとは言えない。(206頁)と指摘されている。「相伝」とか、「聞書」のような類を含む「書物ないしノート」の類だったと考えた方が自然のように思う。更に伊井氏は、

一方ではむしろ注記を縮小整理して示した北村季吟の『湖月抄』が、そのハンディーさと簡潔な内容によって人々の支持を得ることになる。そして近世における研究は、いずれも『湖月抄』を出発点として始められるにいたるほど、ポピュラーな注釈書として流布し、近代になっても戦前までの中心のテキストとして広く読まれてもいた。源氏物語研究の長い歴史において、季吟までを△旧注▽と言い、それ以後の国学者たちによる注釈を△新注▽と呼びならわす。(1158頁)

と指摘されている。『湖月抄』が、諸注の簡略化と集成という、一見矛盾する方法によって人々の支持を得たのは、もちろんそのハンディーさと簡潔な内容によってではあるか、諸注集成という長い源氏物語享受の伝統、正統性を継承しつつ、簡略化によってより広い層の人々への浸透を果すことができたからである。今井卓爾氏は、「集大成と啓蒙性」(『源氏物語批評史の研究』鮎沢書店236頁)と言われる。しかし、『首書』本玉鬘の巻では、注釈書の引用が物語の内容に微妙に対応しながらその種類に変化があらわれること、注釈書の引用がほぼ群を形成していること、注釈書は一書を

簡潔に引用することが一般的で、諸注集成という形をとってはいないこと、等の意味は、もう少し比較検討を加えられてよいことのように思う。既に今井氏も、

季吟の一生は和歌俳諧の雰囲気の中で古典を研究し、それによって又幕府に召されてゐたのであって、波瀾なく落ちつきを得る環境の中に終始した（『源氏物語批評史の研究』235頁）

と、述べられている。季吟は、新玉津島神社の社司となって古典研究に没頭した。幕府の歌学方として召され、目白関口台に別荘疎儀荘を営むなど、江戸時代前期を代表する俳人、歌人、古典研究者として碩学であった。『湖月抄』の流布は、そうした季吟の社会的名声や地位に支えられてもいたのである。一方季吟の門弟には、公卿など上流階級の人々も多かった。『湖月抄』の形態とその享受は、季吟をとりまくそうした環境と深く関わっていたように思われる。

それに対して、『首書』本の注記は、わかりやすさという点を中心にして、適宜簡潔に諸注を引いている。そこには、きわめてストレートに、よりわかりやすく、直接的に問いかけてくる源氏物語の享受の方法が見られる。片桐洋一氏は、和泉書院『首書』本影印本シリーズの『総論・桐壺』の解説で、他注よりも「或抄」が最も多く引用されているのは、「作品の文学的鑑賞を何よりも重視する」「首書源氏」の姿勢と一致する（155頁）と指摘されているが、注釈書の選択、注記のなかにも、やはりそういう姿勢や意図を読みとることができるよう思う。『湖月抄』が、諸注の簡略化と集成、高い啓蒙性、更に季吟という碩学に支えられて、近世源氏学の主流となり得たのに対して、『首書』本は、その享受の一流にとどまったように思われる。啓蒙性を全面に押し出し、物語の鑑賞を重視する源氏学の方法は、ある程度の知識層、上流階級の人々になじまない一面を持っているように思う。『万水一露』は、確かに、膨大な諸注集成ではあるが、それを簡略化して引用する方法は、「或抄」を注記する方法と同質のもので、諸注「集成」に慣れ、それを正統的なものとして享受してきた伝統——それは、『湖月抄』に対する現時点での評価と別である——からすれば、啓蒙性を全面

的に押し出す『首書』本のそのような注記は、一傍流の享受として軽さ、あるなじみにくさを持っていたように思う。

『首書』本と『湖月抄』とが、異本として注記する本文の特徴について、比較、検討し、その背後に存在する異本または異本群の本文的性格、系統について推測を加えることにする。両本の注記する異文が、それぞれ異文総数に対して占める百分率を諸本ごとに集計すると、次のようになる。(A)は、『湖月抄』・(B)は、『首書』本、数値は「%」である。

	(A)		
	50,0	42,9	大
	50,0	42,9	肖
	60,0	28,6	横
	50,0	57,1	証
	40,0	50,0	穂
	40,0	14,3	池
	30,0	7,1	三
	40,0	50,0	河
	60,0	50,0	平
	50,0	57,1	御
	50,0	57,1	宮
	50,0	50,0	鳳
	50,0	57,1	尾
	40,0	57,1	大
	50,0	50,0	七
	10,0	14,3	別
	30,0	57,1	麦
	30,0	57,1	阿
	20,0	28,6	国
	20,0	42,9	保
	10,0	14,3	陽

両本の数値で、顕著な相違が見られるのは、横山家本、池田本、三条西家本、麦生本、阿里莫本、保坂本である。また、『首書』本は、青表紙本系統諸本のみと共通異文を形成するものが四例、四十%に及ぶのに、『湖月抄』では、一例、七・一%に過ぎない。既に指摘したように、両本の本文はきわめて高い親近性を示している。だが、このように両本が注記する異本は、一面、相当異なる本文的性格をもっている。『首書』本も、その異文を注記する「異本」も、「青表紙本群類」として、混成、混態現象をもち、系統論的にきわめて不純な本文的性格をもつものであることは既に指摘した。『首書』本が、異本として注記する本文の顕著な特徴は、「B」「C」「D」群ではきわめて低い親近関係を示して疎遠であった横山家本が、大島本、池田本などを伴って高い親近性をもつことである。そして、それは「異本群」ともいうべき、雑で不整な、系統論的に不純な集成であることを示唆する。

しかし、『湖月抄』の注記する異文は、混成、混態を経てはいるが、雑多な集成とは見られない、そういう意味では「異本群」ではなく、一つの「異本」ともいうべきものを想定することができる。そしてそれは、両本の諸本に見られ

る異文の重なりを図表化した結果と比較、検討すれば、明確に指摘できる顕著な特徴でもある。だが、その混成、混態を現存諸本からほぼ合成し、集成、分類し得るといふ本文的性格をもつことに注意する必要がある。

『首書』本の注記する異文は、池田本、大島本などを伴って横山家本と深い親近性を示しているが、『湖月抄』では、『首書』本の六十・〇％に対して、四例、二十八・六％に過ぎない。また、池田本も四十・〇％に対して、一例、十四・三％に過ぎない。しかし、注意すべきことは池田本に見られる三箇所の補入が、いずれも『湖月抄』注記の異文と共通異文を形成している事実である。このことは、補入以前の池田本が、『湖月抄』注記の異文とは疎遠な関係にあったことを示すもので、系統論的に『首書』本とは異なる異本であることを示している。三条西家本ともやはり疎遠であるが、宮内庁書陵部蔵青表紙証本、穂久邇文庫蔵本とは親近関係が深い。大島本、肖柏本及び河内本の関係は、両本ではやはり本質的な差違は見られない。別本系では、麦生本、阿里莫本、それに次いで保坂本が深い親近関係を保っている。麦生本、阿里莫本との親近関係は『首書』本より顕著で、かつ深い。そして、『湖月抄』の異文注記は、現存諸本との関係のなかでかなり整然とした体系が見られ、『首書』本のような雑然さが無い。このことは、『湖月抄』注記の異本が、やはり混成、混態を経過した系統論的に不純な本文をもちながらも、不整でない点に、伝来の上での素姓のよさを見せている。そして、それは両本の校訂者の社会的地位、物語享受の方法、享受の階層などの微妙な差異を端的に示しているように思う。

上野英子氏（「近世初期源氏物語版本の本文」） 「研究と資料」 第十七輯 昭・62年7月）の研究によれば、『首書』本は慶安本と類似性があり、或は同書を校合に用いたかもしれないこと、万治本と湖月抄とは、ほぼこの慶安本と軌を一にしているらしいこと、を指摘されている。版本をつぶさに調査されての、帚木の巻についての研究であり、それをただちに玉鬘の巻に準用することは、この物語の巻々における本文のありよう、実態からは遊離した推論に違いな

いが、氏は、兩本との関係を、慶安本を祖本及び校合本とする親近性であるという系統論に立たれる。以下その基本的な立論を、直接本文を比較しないで、別の外部徴証によって検討を加えるという一つの立場から、本文と享受をめぐる問題として考えてみる。なお、氏の精確な調査、報告を期待するが、既にこれまでの資料の集計、分析を通して、玉鬘の巻については、結論を要約することができるようにも思う。

「Ⅲ」の冒頭でも要約したように、「首書」本の大島本に対する異文数は百四十四例、「首書」本の独自異文十例、他の諸本を伴って共通異文を形成するもの百三十四例である。うち、「湖月抄」と単独で共通異文を形成するもの二十三例、他の諸本を伴って「湖月抄」とも共通異文を形成するもの八十九例、「湖月抄」が関与する共通異文数は百二十二例に達する。共通異文数に対する「首書」本と「湖月抄」の親近度は八十三・六%、「首書」本の独自異文率は七・五%に過ぎない。

次に、「首書」本と「湖月抄」とを直接対校した「D群」の結果によれば、異文数は二十例である。うち「湖月抄」の独自異文は五例で、十五例が「首書」本以外の諸本と共通異文を形成している。「湖月抄」の独自異文も、片々たる語の相違や誤写によるかと思われるものばかりで、「首書」本の、大島本に対する独自異文十例と、本質的にさして異なる異文とは考えられない。校訂意識を伴った高い次元での本文の改定を、兩本の独自異文のなかに見出すことは困難である。「D群」で示した十五例の異文は、系統的諸本との関係という視点から、その親近度を百分率であらわすと、青表紙本系統九十三・三%、別本系七十三・三%、河内本系統六十・六%となる。これらの異文を混成、混態として捉えるか、逆に諸本群に共通するものとして原本に近いものとして捉えるかは問題であるようにも思える。しかし、兩本の異文の重なりが、若干の共通する類型をもつに過ぎず、そのほとんどが、一例が同時に一つの類型を作るといふ事實は、本文の混成、混態と考えるべきものであることを示している。そして、それは、系統論的にきわめて不純であるとしな

ければならない。この十五例と、独自異文として処理してきた五例の異文が、慶安本と共通異文を形成しているとすれば、上野氏が「慶安本以後に出版された万治本と湖月抄とは、ほぼ慶安本と軌を一つにしているらしい」といわれるのは妥当な見解である。だが、この「D群」の異文に慶安本との共通異文が存在しないとすれば、玉鬘の巻については、上野氏の立論に再検討を加えなければならない。この問題と深くかかわることでもあるが、『湖月抄』と『首書』本との比較、更に諸本との対校という外部的徴証からすれば、「特に慶安本については、首書源氏とも類似性があり、或は同書を校合に用いたかもしれない」というような、両本の親近関係ではないと断定せざるを得ないように思われる。さらに氏の玉鬘の巻についての精確な調査を待つことにする。野村精一氏は、版木の問題のむつかしさを示唆されたが、従うべきことのように思われる。

『首書』本と『湖月抄』の本文の系統と注釈の方法の相違・異文の注記と異本の問題など、主として本文の問題をめぐって、両本の物語享受における微妙な位相を指摘したが、さらに再検討を加うべき問題も多い。

II

大夫の監を戯画化し、烏滸物語として染めあげていく物語作者の筆はしたたかで冴えている。これは、登場人物を作者の側から捉えた世界である。このように、古物語の克服を、作者の介入、草子地の表現のなかに見ようとする物語の方法のほかに、こういう方法を、読者との関わりの中かでなそうとする驚くべき物語の方法が、『源氏』のなかではなされてるように思う。それを「釵」という語の用語意識を通して論証しようとする。

「櫛」の語誌を。記紀や風土記、『古今和歌六帖』などには、一貫する「櫛」の伝承や民俗信仰を基層として形成されてきた世界があることを指摘し、『源氏』に用いられて「櫛」「御櫛」「さし櫛」「かんざし」などの用例を検討す

る。そして、それらの用語意識のなかに、表現された世界や描かれた世界、さらに登場人物の心理や考えなどを越えて、「書かれざる」世界に、作者の語ろうとした物語的世界が存在していたことを明らかにする。こうした物語の方法は、作者と読者が同じ一つの「場」に存在したり、それを意識して物語を享受したという、後宮サロンの文学として一面を持っていたために存在し得るものであったと考える。用例を通して、具体的にそうした物語享受の方法、伝承的基層を明確にしようとした。

第二章 『首書源氏物語』玉鬘の巻の本文と物語の享受 再論

I

「第一章」の論文を発表後、清水婦久子氏が、『首書源氏』・『湖月抄』の本文についての貴重な調査、研究を発表され、拙論の一部にも論述されている。それらについて考え、いささか補訂・再論を試みることにする。

氏（『湖月抄』の底本）△「青須我波良」第四十一号 平・3・6（V）によれば、『湖月抄』の版下の作成には慶安本が使用されており、その底本は慶安本であったといわれる。だが、「北村季吟自身が、慶安本をテキストにしてその上部空白に頭注や傍注を書き入れ、一部本文を校訂して『湖月抄』としたのかどうかはわからない」（42頁）とされる。それは、「本文の全てが一致している訳ではない」からで、既に「市場に巡回していた複数の版本が参照された」とする。

次に、末摘花の巻数丁を例にとって、『湖月抄』の本文校訂の方法を考えられている。「その本文表記は殆ど慶安本と一致するので、慶安本と異なる場合に焦点を当て」異文を調査される。そして、

『湖月抄』の本文校訂は、慶安本を底本とし、『万水一露』や『首書源氏』と各種注釈書を参考しつつ行われたと考えることができる。青表紙本系統あるいは河内本系統の由緒正しい写本を参照していたと考えなければならぬ。例は現在の所見出しておらず、これらの版本とは別の一本を底本にしたとすべき理由もない。季吟が、慶安本と『万水一露』を重視する理由として、それが師匠貞徳の学問によるテキストであったということが挙げられるが、『首書源氏』を参照したと思われることについても、季吟の問題として説明することができる。(50頁)

と指摘される。『湖月抄』に、頭注・傍注形式が取り入れられたのも、『首書源氏』の影響ではなかったかといわれる。
さいに、

『湖月抄』は、内容的には堂上の注釈書のみを引用し、地下の注釈書には一切触れていない。『首書源氏』に度々引用された紹巴抄や万水一露は、その名すら挙がっていない。しかし、季吟自身は、三条西家の注釈を直接伝授されたり、由緒ある本を貴族から借りて書写した訳ではない。松永貞徳は、中院通勝や九条植通そして細川幽斎などから伝えられたものも多かったと思われるが、『湖月抄』発端の部において、「先師」貞徳が九条植通に源氏物語の注釈を伝えられたから『湖月抄』では孟津抄を尊重すると述べている。これによって、季吟自身は、堂上の学問はおろか貞徳の学問すら十分に受け継いでいなかったことが知られる。(52頁)

といわれ、注釈書を引用する際にも、「 \wedge 学問的 \vee とは言い難い方法を取っている」という。

一葉抄を内緒で使用し、万水一露や『首書源氏』などの地下の注釈書の名を出さなかったこと、逆に岷江入楚を「抄」として自説と思わせていることなどは、全て、貞徳を敬愛されていた小高氏が批判的に述べられたような季吟の出世欲の表れとする見方が可能である。先行の研究と自説とを明確にしない『湖月抄』の態度は、現代風に言えば学問的であったとはいえない。『湖月抄』を過大評価してきた風潮は、一度見直すべきであろう。(52頁)

と論断されている。氏は、『首書源氏』を、その跋文によって「地下の編者の狭い庵に置くための古注集成である」、(54頁)「数々の注釈書を一書にまとめることにあった」(55頁)と解され、

『首書源氏』は、従来、新説が少ないことを理由に注釈書として殆ど無視されてきたが、当時の堂上・地下の全ての注釈を知る資料としての価値を認めるべきであろう。(55頁)

と理解されるが、いかがなものであろうか。それは、『首書源氏』が、「注釈書というより源氏物語を読むためのテキストとして作られている」、「本文上部の余白の多い形態は、そのことを示すもので、近世初期までの写本・版本に共通して見られる機能と同じ機能を有している」(56頁)と解されることと、矛盾する跋文の理解だといえないだろうか。氏は『湖月抄』を、「季吟自身の意見を明記することを趣旨としている」とし、その諸注集成としての研究史的位置を著しく減殺されようとする。そして、次のように述べられている。

『湖月抄』以前には、既に万水一露や岷江入楚などの古注集成があり、テキストとして入手し易い『絵入源氏』や『首書源氏』などがあった。『湖月抄』は、それらの業績を踏まえて、さらに新しい解釈を加えたものと言える。『首書源氏』と『湖月抄』とを、刊行が二、三年程度しか離れていないことによって単純に比べ、新説の多い方を評価するのは、原『首書源氏』なる注釈書の成立が、跋文に記された寛永十七年(一六四〇)で刊行より三十年も前のことであることや、その三十年間が出版文化の急速な発展期に当たることなどを見落としたものと言える。近世初期における文芸活動にはあまりにも不明の点が多く、古典を貴族だけのものから庶民の手に広めた人々の苦勞については殆ど問題にされることはないが、季吟が評価されるべきは、こうした状況を敏感に受け止め、有効に利用したことであつたと思うのである。(57頁)

推論を重ねられての論証であるが、その過程で、いくつかの矛盾や錯誤が見られるようであり、以下述べるごとく、

従い難い点もまた、多いように思われる。

さらに氏は、『首書源氏物語』の本文——同時代の版本との係わり——〔『王朝の文学とその系譜』片桐洋一編 和泉書院 一九九一・一〇〕において、桐壺、帚木、若紫、末摘花、葵、絵合、松風の七帖について、各種版本を比較、調査され、

『首書源氏』の最終的な本文は、万治本を底本にしていたと考えられる。また、万治本との共通異文や誤写による独自異文などによって、『首書源氏』編者が、「絵入源氏」としては万治本のみを使用し、慶安本も無刊記小本も参照していなかったことがわかる。それは七巻のみの調査によるものであるから、今後他の巻々の調査によって修正を加える必要も生じるかと思うが、大筋においては『首書源氏』全巻に共通すると予想される。(403頁)

と指摘された。そして、寛永十七年(一六四〇)跋文にみられる編者「一竿斎」は、「松永貞徳またはその門人で、それを編集して出版した人物は貞門の誰かではないか」、「本文の決定は、春正と親交のない人物によって万治三年(一六六〇)から寛文十三年(一六七三)の間に行われた」(403頁)とされる。

氏はさらに、『湖月抄』とこれらの版本とを比べてみると、

『湖月抄』の本文表記の一字一句が、慶安本を基にして作られたことは、歴然としている。一部の表記を変化させ、本文も校訂されているが、全体としては、『湖月抄』の底本は慶安本であると見て間違いあるまい。この相似は、万治本と『首書源氏』の関係よりも顕著である。そして、慶安本と異なる部分を細かく見てゆくと、その殆どが版本『万水一路』または『首書源氏』によって校訂されていることが窺える。詳しくは別稿で述べる予定であるが、『湖月抄』の本文は、慶安本を底本にして、『首書源氏』『万水一路』や各種注釈書などによって校訂されたものと考えられるのである。(404頁)

と論断されている。また、『首書源氏』は、「万治本を底本として採用しているが、適宜他の本文によって校訂している。」校訂に使用した本も、「三条西家系統の由緒ある写本などではなく、これまで見てきた各種版本や注釈書の類であった」(404頁)と指摘されている。そして、『首書源氏』の青表紙本系統の本文の注記は「万水一路」などから、河内本系統のそれは、『花鳥余情』や宗祇注などの注釈書から採られたものであったといわれる。氏の「追記」によれば「首書源氏物語」の本文——同時代の版本との係わり——を脱稿後、『湖月抄』の底本」を執筆された由であるが、論述の必要上発表の順序に従って研究史的展望を試みた。清水婦久子氏には、「版本「絵入源氏物語」の諸本(上)——慶安三年跋文の成立と出版」(「青須我波良」第三十八号 平・元・十二・)、」版本「絵入源氏物語」の諸本(下)——万治版横本・無刊記小本の成立——(「青須我波良」第三十九号 平・二・六・)の業績があり、それらを踏えられての立論であるが、森昇一氏「首書源氏物語の本文——下二段活用の「給ふる」の表記をめぐって——」(「野州国文学」第四十五号 平・二・三・国学院栃木短大)によれば、一竿斎は「積了真」であるといわれる。氏は、「(積了真著 寛永十七年跋・寛文十三年刊)(1頁)とされる。清水氏は、和泉書院「影印叢刊別巻 首書源氏物語」の片桐洋一氏(「総論・桐壺」)の論を承けられての発言であるが、いかがなものであろうか。以下、再検討を加え、再論を試みることにする。

確かに季吟の学問的態度には、小高敏郎氏(「新訂 松永貞徳の研究 続篇」臨川書店)が指摘されるように、「幕府に召されて功成り名とげた六十七歳以降の十五年は、殆んど学問的業績を残さなかった」(73頁)ことは事実であるが、その学問内容は語釈や出典の解明を主とし、その面で博引旁証を誇り、諸説を並記するのみである。彼自身の判断を明瞭にしないばかりか、取捨選択さへ十分には行はれてゐない。その精力的な仕事ぶりと上述の学問の普及点では敬服するが、そのもの自体の独自の学問的価値、及び学問的方法論より見れば、安易な集成に止まってるて甚だ物足りない。(72頁)

学問が「道」的なもの、倫理的なものでなかったことは、彼の学問を主観的な歪曲より脱せしめ、客観的解釈といはれる長所を与へることゝなったが、同時に彼の学問に个性的魅力や深みを与へず、社会的地位の安泰が、その学問的意欲を減殺してしまふ結果となつたと思はれる。(74頁)

というように考えることは、学問を中世的な「道」、求道の精神という論点から捉え過ぎているように思う。研究と学問という近世的な学問のあり方とも関わる問題として、立論の視座をずらして再検討を加うべき余地が残されているようにおもわれる。季吟の学問、教学を、こういう視座だけで据え直そうとすることは、やはり正鵠を射たものとは言い難いのである。

II

『首書源氏物語 玉鬘』(岩下光雄編 和泉書院)の「補注」のなかで、清水婦久子氏が指摘された問題の資料となるかと思われる注記は、次の七十項目である。これを「補注」から抄記し、資料番号を①から⑩までつけて示した。但し、⑩は「補注」にはないが、資料としてつけ加えたので、資料番号は⑩となる。『慶安本』『万治本』は、ともに国立国会図書館蔵本を用いたが、慶安本には、書入れ、補入の類が非常に多く、本文自体にも手を加えている。これを第一資料とする。第二資料は、四本の漢字使用の実態を十二の抽出資料によって調査した。資料②を集計すると次のようになる。

十二資料のうち、『湖月抄』と『慶安本』の漢字使用は、資料⑧の一例「思出」(『湖月』)「出」(『慶安』)が異なるだけで、それ以外の一六八例はすべて共通する。『湖月抄』のこの一例は、『万治本』と共通する。だが、この事實は、清水婦久子氏が指摘されるように、『湖月抄』の底本が『慶安本』であり、版下の作成には慶安本が使用されていたとする考えを、玉鬘の巻についても支持するものにほかならない。既にこのことは、上野英子氏(近世初期源氏物語版本の

湖月抄	慶安本	万治本	首書本	諸本	
				資料	計
18	18	20	17	①	
14	14	15	6	②	
20	20	21	14	③	
17	17	17	8	④	
12	12	16	15	⑤	
21	21	20	16	⑥	
11	11	12	5	⑦	
7	7	8	4	⑧	
12	12	14	9	⑨	
19	19	19	17	⑩	
10	10	11	12	⑪	
8	8	5	5	⑫	
169	169	178	128	計	
26.2	26.2	27.6	19.9	%	

本文(一)「研究と資料」第十七輯 昭62年7月)によつて、『首書』本は、『慶安本』と類似性があり、或は同書を校合に用いたかもしれないこと、『万治本』と『湖月抄』とは、ほぼこの『慶安本』と軌を一にしているらしいことを指摘されていた。清水氏の研究は、『絵入源氏』七帖の調査を通して、上野氏の論を補綴修正されたところに研究的な業績が存する。氏が指摘されるように、『慶安本』の一般化、普及化が『万治本』の成立であつたと考えてもよいが、玉鬘巻に見られる用字上からの顕著な特徴は、漢字の使用百分率が二十七・八%と四本中最も高いことである。これに對して、『首書』本は最も低く、二二八字と五十字も少ない。百分率も十九・九%に過ぎない。この事實は、両本の性格を考へる上で、精確な本文的事実とともに検討を加えなければならぬことのように思う。

『首書』本の本文が『湖月抄』一本のみと共通異文を形成しているものを第一資料から抜き出し、資料番号で示すと次のようになる。

①・②・⑤・⑩・⑫・⑬・⑭・⑮・⑲・⑳・㉑・㉒・㉓・㉔・㉕・㉖・㉗・㉘・㉙・㉚・㉛・㉜・㉝・㉞・㉟・㊱・㊲・㊳・㊴・㊵・㊶・㊷・㊸・㊹・㊺

右の二十二例のうち、㉓・㉔は、『万治本』のみと共通異文を形成する。その他の二十例は、『万治』、『慶安』両本と共通異文を形成する。資料の㉓・㉔は、一見確かに『首書』本と『万治本』とが、『慶安本』よりも親近関係が深いことを示しているように見える。だが、漢字使用の用字意識や本文的事実からは、清水氏が指摘されるように、『慶安本』

と『湖月抄』本との関係と同列に『万治本』を『首書』本の底本として使用したというような単純明解な本文の流伝、系統論の樹立に躊躇いを感じないではいられない。共通異文、独自異文の処理には、精確な本文的事実、証跡の集積を通じた文献学的処置が講じられなければならないように思う。

次に『湖月抄』と若干数の諸本が『首書』本と共通異文を形成するものを、第一資料から抜き出し、資料番号で示すと次のようになる。ここで、「若干数」とは、二、三の諸本までをいう。「河」は、一本として扱う。『湖月抄』と共通異文を形成する諸本を略号で資料番号の下に示した。

- ③陽・⑦三・⑪三・⑭証・東・⑮三・陽・⑯三・⑳池・三・㉑証・河・㉒陽・㉓保・㉔保・㉕首・保・㉖首・㉗証・穂・
 ⑬穂・東・⑭池・三・⑮陽・⑯七・⑰穂・⑱陽・㉒陽・㉓首・⑳河・㉑河・㉒首・陽・

右の二十三例は、すべて『万治本』『慶安本』両本と共通異文を形成する。これを諸本、本文系統別に還元、集計すると次のようになる。穂久邇文庫蔵本は、青表紙本系統に入れて集計する。

青表紙本系統		河内本系統		別本系統	
三條西	6	河内本	2	陽明	7
肖柏	4	七毫	1	保坂	1
証本	3				
穂久邇	3				
東各筆	2				
池田	2				
合計	20		3		8
	64.5		9.7		25.8

諸本の上段は異文数、下段は全異文数に対する百分率である。「首書」本の本文が「湖月抄」を伴って他の若干の諸本と共通異文を形成する場合、青表紙本系統の諸本が六十四・五%と最も高い百分率を示している。河内本系統の諸本が最も低く、九・七%に過ぎない。別本系の百分率は二十五・八%であり、混成、混態を経た青表紙本群類の本文であるが別本系に親近性を持つものであることを示している。

ところが、「湖月抄」を伴わないで単独または若干の諸本と共通異文を形成している「首書」本の本文を、第一資料から抜き出し、資料番号で示すと次のようになる。「首書」本と共通異文を形成する諸本を略号で資料番号の下に示した。

⑥国・麥・阿・²⁵証・³³肖・⁴⁸陽・⁶³肖・三・⁶⁸証・⁶⁹池・⁷⁰肖・証・

右の八例のうち、「湖月抄」を伴って「首書」本、「万治本」、「慶安本」と共通異文を形成することに関与しなかった諸本は、国冬本、麥生体、阿里莫本の三本である。資料番号⑥であるが、「首書」本とこの三本のみが、「かみほとけ」の異文を持ち、その他の諸本は「仏神」となっている。但し、「万水」は「首書」に同じ。「万水」、「慶安」両本と共通異文を形成するのは、²⁵、⁶³、⁷⁰の三例で、関与する諸本は、宮内庁書陵部蔵青表紙証本、肖柏本、三条西家本の三本でいずれも青表紙本系統の諸本である。既に指摘したごとく「湖月抄」を伴って共通異文を形成する場合、「万治」「慶安」両本は一〇〇%共通異文を形成した。しかし、「湖月抄」を伴わない異文の場合は、両本と共通異文を形成するもの百分率は、三十七・五%にとどまる。両本と共通異文とはならない六十二・五%のものは、すべて「大島本その他の諸本に同じ」である。これは、「万治」「慶安」両本を校合しても、なお、「首書」本の独自異文として残った六十%の異文の性格とはほぼ一致する。それらの関係を、資料番号によって示すと次のようになる。玉鬘の巻についてのこれらの本文の性格は、「万治本」を底本として「首書」本が作られ、各種版本や注釈書の類によって適宜校訂されたと考えられる清水氏の立論に、「万水一路」と共通異文を形成する⑥を除外すれば、きわめて不利な反証を与えるものといわざる

を得ない。

異文	性格の系統	大島本その他の諸本に同じ	一部を除き上記に同じ	その他
独自異文として残ったもの	④・②④・③①・⑤⑧	⑩・⑳		
『万治』『慶安』両本と共通 異文とならないもの	③⑤・④⑥・⑥⑧・⑥⑨			⑥

既に指摘したごとく、『首書』本の異文が、校合に用いた二十本と共通異文を形成する場合の大きな特徴は、共通異文のあらわれ方が八十四の類型に達するという点である。他の諸本と共通異文を形成する百三十四例中、『湖月抄』のみと単独で共通異文を形成する二十二例を除く百十二例は、二十八例が十一の類型に集約されるほかは、すべて一例が一つの類型を形成している。共通異文数に対する『首書』本と『湖月抄』の親近度は八十三・六％、『首書』本の独自異文率は七・五％に過ぎない。これらの事実は、『首書』本の本文が、校訂にかゝわる混成、混態を経た系統論的にきわめて不純なものであることを示している。だが、『万治本』との校合の結果、『首書』本の独自異文と考えられていた十例中の四例が、『慶安本』との校合によってその中の三例が共通異文となるといふ本文的事実も重要である。また、『首書』本が『湖月抄』と単独で共通異文を形成する二十二例が、『万治本』では二十二例、『慶安本』では二十例が共通異文を形成すること、さらに、『首書』本が『湖月抄』と若干の諸本を伴って共通異文を形成する二十三例が、すべて『万治』、『慶安』両本と共通異文を形成するといふ本文的事実に注意する必要がある。さらに、『首書』本が、『湖月抄』を伴わないで他の諸本と単独または若干の諸本とによって共通異文を形成する八例のうち、三例が『万治』、『慶安』両本と共通異文を形成するという事実、これらの事実を単純化すると、両本と『首書』本は、『湖月抄』と『首書』本よりも、深い親近関係にあると見ることもできる。清水氏の精確な調査、研究を期待する。

清水氏も指摘されてはいるが、『首書』本と『万治本』との本文関係は、『慶安本』と『湖月抄』との本文関係よりも親近関係は疎縁である。それは、両本の漢字使用が、『慶安』、『湖月抄』両本を挿んで、きわめて対峙的であることと深く関わるものとなっている。竹内美智子氏（『仮名文 3 物語』、『漢字講座 5 古代の漢字とことば』明治書院 昭63初版）は、『尾州家河内本源氏物語』若菜上に用いられた漢字を調査され、

敬語の表記を除くと、『土佐日記』の漢字使用の状況からそれほど大きく逸脱してはいない。『土佐日記』を貫之が記したのが十世紀半ばであることから、『尾州家河内本』の書写された十三世紀半ばまでには三世紀が過ぎている。その長い年月の間、仮名の散文を書く場合の漢字使用には、際立った変化は起こっていない。この事實は、十世紀半ばに親行によって『源氏物語』本文が校訂された場合にも、少なくとも漢字の交用については、かなり伝来のままの姿をとどめたことを意味するのではないか。親行の校訂は解釈学的色彩が強いといわれるが、そのために仮名を漢字に書き改めた形跡はあまり認められない。（381頁）

と指摘されている。立論の前提とされる池田亀鑑博士の研究そのものに問題があるように考えているが、春日政治博士の『国語文体発達史序説』を傍証に引いての竹内氏の論に従うべきものと思う。清水氏も指摘されるように、近世木版本の成立、普及が、古活字本よりもより漢字使用を容易にしていたという事情も思量されなければならない。既に諏訪春雄氏（『出版文化と漢字』『漢字講座 7 近世の漢字とことば』明治書院 昭62・）が指摘されているように「木版印刷がさかんとなって、漢字の書かれ、読まれる機会が増化するとともにきわめて目立つ現象となった」（42頁）、
「出版、とくに整版本の普及が、日本人の漢字感覚を質的にも量的にも飛躍的に高めた」（45頁）のである。さらに氏は、

しかし、日本人は、伝統的には、ひらがなは女性、漢字は男性が使用するものという観念を持っており、この漢字に対する観念が、近世の出版形態を二つに区分していく。(46頁)

と指摘され、「草子」(草子屋・地本問屋)と「書物」(本屋中間)に分化していくといわれる。『首書』本の漢字使用率の低さは、こういう視点からも捉えていかなければならないが、そこには、やはり本文を校訂しようとする強い意識が存在していたことを認めなければならぬ。そういう意識が、『万治本』対『首書』本との関係を、『慶安本』対『湖月抄』本との関係というように、並列関係に安易に置くことのできない本文証跡を形成していくことになる。学習院大学付属図書館蔵『首書源氏物語』跋文は、次のようになっている。

わつかにひさをいるゝはかりのいほりには数かすの抄ををかんも所せければおほむねその詞をその所々にかきて我青氈とするものなり河海のふかきところ花鳥の色をも音をも思ひわくはかりの心にしあらねはひか事おほかるへし人の見ることなからんことそねかはしき

寛永十七庚辰年六月中旬洛北山下

一竿上斎

この跋文は、「狭い草庵の中にいろいろな注釈書を置くにも場所がない。だいたい諸注の注記を該当箇所抄出して自分の宝物として秘蔵するのだ。『河海抄』や『花鳥余情』のようなすぐれた注釈書にはとうてい及ばない。間違ひも多いだろうから、他人が披見しないよう希望する。」というような意味に理解すべきであろう。「数かすの抄を置かかんも所狭ければ、おほむねその詞をその所々に書きて」というのは、諸注の「集成」とは考えられない。適宜「抄出」したと解すべきで、『岷江入楚』や『湖月抄』がめざしたように諸注「集成」では決してない。『岷江入楚』の序文に、幽齋が、「あまたの抄物をたづさふることは其わづらひあれば、古来の注釈を一覧の為にしあつむべき」企てを持って

いたと記しているのと対峙するとき『首書』本の跋文に注意すべきである。江戸時代における源氏物語享受の正統は、諸注の集成、師説の継承と自説の開陳にあった。そういう伝統的、正統的な「源氏」読みからすれば、『首書』本の「抄出」という方法は、ユニークであったに違いない。片桐洋一氏（『首書源氏物語 総論 桐壺』和泉書院）や清水婦久子氏は、この時代の類似の書と同じく、「諸注集成と称するにふさわしい」（135頁）と指摘されているが、従い難いことのように思われる。やはり、『岷江入楚』のような諸注集成とは違っている。片桐氏が指摘されるように、「物語の内容と展開を素直に理解するための適確な助言」（136頁）と解すべきであり、そのための諸注「抄出」であると考えべきである。それは、

考証的に過ぎた古い時代の注釈書とは違って、物語を楽しんで鑑賞し、それをわかりやすく説明する態度がはつきりと示されている。（135頁）

と片桐氏が指摘されているのに尽される諸注「抄出」なのである。その結果として「集成」の形をとっている部分もあるが、それは、『岷江入楚』や『湖月抄』のような諸注の「集成」とは全く違った意味での「集成」であることを峻別しなければならない。「この時代の類似の書と同じ」とは解し難いのである。それは冒頭（巻頭）に見られる諸注の「集成」とは全く内容を異にしていると考えなければならない。

『湖月抄』の研究史的価値を著しく減殺された清水氏の立論は、季吟の注釈書の引用態度と『慶安本』を底本とする本文校訂と注記の方法とを論拠にされての論証であるが、従い難い点も多い。国立国会図書館蔵『慶安本』玉鬘の巻は、書き入れが多く、注記はもとより、本文にも校訂を加えるなど、それ自体が既に注釈書の形態を整えているという事実注意到する必要がある。阿部秋生博士校訂『完本源氏物語』（小学館）の本文を無断で拝借して注釈書を作ってしまうとか、現代の著作権に関わるような論点から『慶安本』の本文採択を考えることは誤りであろう。清水氏も指摘されて

いるように、書き入れが可能であるように、そういう物語の享受にたえ得るように版本が作られているという事実に注意しなければならぬのである。そこに、季吟の人間のありようを短絡させて考えていくことは、当を得たものとはいえないように思われる。

国立国会図書館蔵『慶安本源氏物語』玉鬘の巻を約六十六％に縮約し、冒頭の部分、比較的多くの注記と本文に校合、校訂の書き入れの手が加わっていると思われる末尾に近い部分、末尾の部分の三箇所、ほぼ三丁分余りを示す。書き入れは、複数の別筆でなされている。任意に抽出した部分的な資料に過ぎないが、以下、校合、校訂を加えている本文の系統論上の性質、注記の内容、注釈書との関係などについて、いささか調査、検討を加えることにする。

本文に校合、校訂を加えている部分を資料番号をつけて示すと次のごとくである。但し句読点、濁点などに関わるものは除外し、示さなかった。

- ①おほえ——「御」補入。△御おほえ 肖・河・保・▽△「御」補入 三▽
- ②よしとても——「し」見セ消チ「き」補入。△よしとても 肖・河・▽△ソノ他ノ諸本「よき」▽
- ③とびちがひ——「とび」見セ消チ。△ちがひ 横、池、三・▽
- ④さうぞく——「さ」見セ消チ「せ」補入。「ぞ」左傍ニ「〇」△御せうぞく 横、池、三・▽△御文はみな 陽▽
△大島本ソノ他ノ諸本「御せうそこ」▽
- ⑤げににげついたり——「げ」、「げ」トモニ見セ消チ。△ににげついたり 肖▽△ににげついたりとも 河▽△しににげついたりとも 陽▽△ににけついたりとも 保▽△についたりともを 麥、河▽
- ⑥ども——「ども」見セ消チ。大島本、ソノ他青表紙諸本同ジ。△河・別スベテ「とも」アリ。▽
- ⑦みな——「みな」見セ消チ。ナシ三・△大島本ソノ他ノ諸本「みな」▽

⑧ども——「ども」見セ消チ。△大島本ソノ他ノ諸本スベテ「とも」アリ▽

⑨未摘花——「花」見セ消チ。大島本、肖ヲ除クソノ他ノ青表紙本。△肖・河・別・「未摘花」▽

⑩えんなるべきを——薄ク全面ヲ見セ消チカ。△大島本ソノ他ノ諸本スベテ「えんなるべきを」▽

⑪ここにも——「も」見セ消チ。肖・御・陽・△ここに 阿▽

『慶安本』の本文に校合、校訂を加えている本文を、『源氏物語大成』、諸注に注記されている本文との関係から調査、検討すると次のごとくである。算用数字は資料番号で、略号は『大成』のそれによった。

共通異文を形成する諸本	資料番号
横、池、三・	③④⑨
大、横、池、三、別・	②
肖・河・保・	①
大、横、池、肖、三・	⑥
三・	⑦
肖・御・陽	⑪
独自異文	⑤⑧⑩

これらの関係を諸本ごとに還元し単純化して示すと次のようになる。

(1)三条西家本 六例 五十四・五%

(2)横山本 五例 四十五・五%

(3)池田本	五例	四十五・五%
(4)肖柏本	三例	二十七・三%
(5)大島本	二例	十八・二%
(6)別本系	三例	二十七・三%
(7)河内本系統	二例	十八・二%

校合、校訂に用いられた本文は、青表紙本と最も親近関係が深い、なお別本系、河内本系統の諸本と共通異文を形成している。しかし、別本系、河内本系統の諸本とそれぞれ、単独に共通異文を形成するものは存在せず、必ず青表紙本系統の諸本を伴っている。肖柏本を伴う事が多いが、そういう視点からすれば、混態本文ではなく、青表紙本系統の諸本による校合、校訂であったと思量すべきである。ただ、『大成』所収の諸本とは共通異文を形成しない独自異文が、二十七・三%存在している。しかもこれらは、注釈書引用本文による異文ではない。

次に注記の内容、注釈書との関係などについて検討する。『河海抄』（玉上琢弥編）は角川書店版・その他は桜楓社版「源氏物語古注集成」所収の注釈書を用いた。注記の順序に従い、仮に資料番号を付して抄出する。

①「秘 以哥為卷名」「河 源氏」の表記は「岷江入楚」など。但し「秘」云々の項は注記の本文中にも見え、重複し不審。注記の内容は諸注釈書に共通するものであるが、末尾の「夕霧の君は」以下の記述と一致しているのは「岷江入楚」と『万水一露』である。

②「とし月へたゝりぬれと…」「花玉鬘君の」の冒頭は「花鳥余情」以下「岷江入楚」、『万水一露』の注記。「此巻の始末摘花と同時也」以下は、『河海抄』以下、『岷江入楚』の注記と同じ。『万水一露』は、『細流抄』を引く。『湖月抄』も『細流抄』を引く。次の「秘 此発端末摘花ニ似たり」以下の注記は『万水一露』『首書源氏』『湖月抄』な

どこに見えるが「秘」という表記は『岷江入楚』だけである。「私秘義」以下の注記は『岷江入楚』だけに見え、諸注には見えない。

③「あらましかはと」『河海抄』の注記を引くのは『万水一露』『首書源氏』『岷江入楚』『孟津抄』など。最後の「私此義」以下の注記は『岷江入楚』だけに見える。

④「心よくかひそめたる」『河海抄』の注記を引くのは、『孟津抄』『首書源氏』『岷江入楚』などであるが、「右今かさま也。」として『河』を引くのは、『岷江入楚』だけに見える。

玉鬘の巻冒頭部分について注記の内容を調査した結果、『慶安本』の書き入れは、若干の語句の異同などは見られるものの、『岷江入楚』による書き入れであることはほぼ間違いない。

次に巻末に近い部分ほぼ一丁分について調査・検討する。

⑤「見やり給へるにたゝならず」『花鳥余情』には「源氏の紫のうへの心中をさとり給てそなたをみやり給へは紫の上はちらひ給ふをたゝならずといへり」とあり、『岷江入楚』などは「花」と表記してこの本文を引用する。『万水一露』の『花鳥余情』の注記に対する解釈は誤りである。『孟津抄』には、「花鳥には源の紫の心中をさとり給てそなたをみやり玉へは紫のはちらひたまふをたゝならずといへりと云々」とあり、「紫上ハヂラヒ」に異文がみられるが、『慶安本』の書き入れは、『花鳥余情』を要約的に記した『孟津抄』に最も近いとすべきであろうか。だが、やはり『岷江』に近いとすべきであろうか。

⑥「いてこのかたちのよそへは」『花鳥余情』の注記の一部を引くのは『岷江入楚』であり、『万水一露』などもそれを承けている。『慶安本』の注記は「有限物也」と漢文的表記になっているが、諸注の注記には見えない。資料⑤の片仮名書き表記とともに注意すべきであろう。この部分『花鳥余情』そのものにも、それを引く諸注釈書にも本文

の異同が見られる。底本の『松永本』と『静嘉堂本』には「みとおしみれはもとせしのあるを」の校異が見られるが、『岷江入楚』は「みれはみとをしのあるを」、「万水一露」は「みとをりのあるも」とあり、『岷江』の本文は『静嘉堂本』。『万水』の本文は『松永本』系統に属すると判断すべきであろう。『慶安本』の書き入れは、「みれはみおとしのあるを」と『静嘉堂本』系統。『首書源氏』頭注は、「見れは見なをしのあるを」とあり、同系統。若干の本文の異同を伴いながら、『慶安本』の書き入れは、やはり『岷江』、『首書』もこれに近いとすべきである。『湖月抄』は、『細』、『弄』、『孟』の順に諸注釈書を引く。以下、「かきりなき心也河海の説いかかとおほえ侍り」は、『万水』でなく、『岷江』。『首書』も同じ。次に『弄花抄』を引くのは、『孟』、『岷』、『万水』・『首書』なども、『慶安本』の書き入れと一致する。

⑦「をくれたるも又猶そこある物を」『孟津抄』『岷江入楚』だけが注記。「河海説いかくと覚侍云々」で終る『孟』の注記に対し、『慶安本』の書き入れは、その後に「不審只今書のする義を用ふへし」とある『岷江』の注記と一致する。

⑧「柳のをり物のよしある」『孟津抄』は「花鳥余情」だけを引用。『万水一露』は「花鳥」「弄花」などを「碩」としてひと続きに引用する。『慶安本』書き入れのごとく「花」「弄」と並列する注記は『岷江』の注記と一致する。

⑨「梅のおり枝：あかしの御かたに」『花鳥』の注記は『孟』、『首書』も引き、『万水』も引用。最後に『細流抄』を引く。『慶安本』の書き入れは『河』、『秘』、『花』の順に引用注記する。『岷江』と完全に一致している。

⑩「げににげづいたるらんの御心」『慶安本』書き入れのごとく『河』、『秘』、『花』の順に注記を引くのは『岷江』だけで、完全に一致する。

⑪「うつせみの尼君に青にひのをり物のいと心はせあるを見つけ給ひて御れうにあるくちなしの御そゆるし色なるそへて」『慶安本』本文は「そへ給ひて」となっているが、『河海』『花鳥』『岷江』などの引用本文には「給ひ」がな

く、「孟」「万水」などにはある。河内本に対する青表紙の本文異同に関わる。「慶安本」書き入れは、「弄」「花」「河」「弄」「古詞」「私」の順に従って注記されている。「岷江」は

弄御れうに 源氏ノ御料

(秘) ゆるし色はうす紅色也

とある。冒頭部分が「弄ゆるし色はうす紅也」とある「書き入れ」と異なるが、以下の注記は「岷江」と完全に一致し、他の注釈書には、こうした類の注記は全くみられない。

玉鬘の巻の末尾に近い部分の「慶安本」の書き入れは、資料⑤から⑩まで、ことごとく「岷江入楚」による書き入れであったと考えられる。⑤には「孟津抄」⑥には部分的に「孟津抄」「万水」などとの関係を指摘することもできるが、やはり「岷江入楚」との深い関わりが注意される。⑦⑧⑨⑩も、⑩の冒頭注記に問題はあるが、ことごとく「岷江入楚」による書き入れであったことを示している。

最後に、巻末の注記について調査、検討を加えることにする。

⑫「むしみなそこなひて」「万水」は「同 紫上の御かたにありし本をは虫みなそこなひたる由なり紫上の詞也」、「孟」は「源詞」とする。紫上の詞である。「慶安本」の書き入れは「和歌の髓脳紫上の御かたに残りたるも虫のそこなひたる也」以下もすべて「岷江」の注記に同じ。

⑬「ひめぎみの御学問に」「孟」は「源詞也姫君にみせ申さむは無用と也」、「万水」は「碩明石の姫君のためにはさやうの古風の本は用にはあるましきとの源氏の御詞なり」とある。「慶安本」の書き入れと一致するのは「岷江」の注記である。

⑭「すへて女は」「慶安本」の傍注書き入れと同じ注記は「岷江」。以⑯下までは傍注。⑮「なにごとく」「慶安本」

の書き入れと同じ注記は『岷江』。

⑯ 「ただ心のすぢを」『慶安本』の書き入れと同じ注記は『岷江』。

⑰ 「かへしやりてんと」頭注については⑱で関連して述べる。『万水』には諸注を引く長い注記がある。『岷江』にも『花鳥』などを引く注記が見える。『孟』は「末摘花の返哥を源よりせらるまじきとおほすなり」とある。『慶安本』の簡潔で要約的な書き入れが何によるものかを特定する事は困難であるが、このような注記が存在することも注意する必要がある。

⑱ 「かへしかりてんとあめるを」△頭注▽『万水』は『閑』『花』『細』の順に注記を引く。『慶安本』の書き入れのように、『秘』『花』の順に注記するのは『岷江』である。

⑲ 「御返事はおほしもかけねは」『慶安本』の書き入れのように「秘かく物語し給ひて」の表記は『岷江』だけである。

⑳ 「かへさんと云につけても」『孟』は「かへしやる袖ぬらすとあるはことほりと云心なり」の後に『花鳥』の注記を引用。『万水』は『碩閑』『花』『細』の順に注記を引く。『湖月抄』は『細』『花』『師』の順に注記を引く。『首書』は「源氏也」として『花』を引く。この部分の注記は諸注のなかに内容的に共通するものが多いが、『慶安本』の書き入れのように、『秘』『花』の表記の形をとるのは『岷江入楚』だけである。

玉鬘巻の巻末部分の『慶安本』の書き入れは、資料⑲から⑳であるが、⑰の傍注は何の注釈書による注記か特定することは困難である。しかし、その他の八つの資料はことごとく『岷江入楚』によるものであると考えなければならぬ。以上述べて来たところを略号によって一覧にまとめると、次のようになる。

「岷江」と共通するもの	②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳
「岷江」・「万水」とも共通するもの	①
いずれとも特定できないもの	⑳

※若干の問題を残すかと思われるもの

中院通勝の「岷江入楚」は、伊井春樹氏（『源氏物語注釈史の研究』桜楓社）が指摘されるように、「自序と幽斎の跋文によって明らかのように、慶長三年（一五九八）六月十九日、十年の苦節の末に成立した、室町末期最大の五十四帖からなる源氏物語の注釈書である。」（451頁）それは、「幽斎の企図を具体化した」「三条西家の源氏学を中核」とする「諸注集成」であった。国立国会図書館蔵『慶安本源氏物語』の書き入れは、その本文校訂の実態や注釈書引用の態度から三条西家の源氏学を享受しようとする立場からなされたものであることはほぼ疑い難い事実である。清水婦久子氏が指摘されるように北村季吟が底本として『慶安本』を使用したことは、おそらく物語享受の方法における長い伝統に依拠するものであったのではないか。季吟の方法をその人間性の問題として短絡させていく立論には、にわかに従い難いように思われる。

第三章 「面影」の語誌と物語の享受

源氏物語の作者は、したたかな用語意識の持ち主であり、用語を操る術にきわめて長けた作家でもあった。源氏物語の作者の用語意識には、例えば柿本人麿の「夕波千鳥」、与謝野晶子の「桜月夜」のごとく、誇らしい、きらりと輝く

ような造語をつくり出していくことは少なかつたように思う。既成の語彙や歌語の語誌に鋭く迫り、それに寄りかゝりながら、物語を創造し、形象化していく歌人的素質を豊かにもった作家であつたように思う。それだけに、一つの歌語・語彙あるいは歌ことは表現のなかに、作者の用語意識をよみとらうとする営みは、半面、きわめて個性的、主体的に、この物語を読んでいくことにもなる。そして、そうした営みを通して、源氏物語の世界——その本質と主題——へと迫り、それをよみ解いていくこともできる、という事実と方法とを知る必要がある。

「資料Ⅰ」「万葉集」にかかげた資料をもとに、「(御)面影」の語が、源氏物語の世界とどのような関わりをもっているのか、その語誌を背後に考慮しながら、具体的に検討を加えていくことにする。

若紫の巻で、光源氏は紫の姫君を「面影」(資料(4))として捉え、「資料」(5)、(6)、(7)、(9)、(11)と、若紫の巻から明石の巻に至る四帖六例の、この語の用例の中に、一貫して紫上との深い愛の絆の世界を語る。「資料」(8)は、紫上が遠く別れていった源氏への愛の絆を、この語によって確かめている。ただ、その立場を逆転させているに過ぎない。その間、「資料」(10)は、源氏が桐壺院の面影を夢見ることによって、須磨、明石の流離、謫居の運命がひらけ、救われて、六条院の栄華へのみちを登りつめていく。「御面影」の「資料」(2)は、その伏線・序曲である。「資料」(12)では、紫上と藤壺とが重ねられ、(18)で、源氏は亡き紫上を恋して、悲しく面影にしのみ、慰めかねている。その間、「資料」(13)では夕霧の雲井雁への想いを、(14)で源氏の玉鬘への懸想を「面影」として捉えている。それは、(3)にまで遡源していくことができる。

野分の朝、夕霧が紫上を垣間見て、心まどわす「御面影」、「資料」(3)は、柏木と女三宮との密通を対偶的に語る源氏物語第二部の世界への伏線・序曲ともなっている。「資料」(16)は、臨終に近い柏木の女三宮に対する想いを「面影」として捉える。野分の巻の場面は、若菜上巻「資料」(15)で再びくり返し、対偶的に再現される。(17)では、夕霧の柏木に対

する挽歌の心情を「面影」の語で表現していく。この三帖、四例の「(御)面影」の語を、したたかに操りながら、緊密な対偶意識によって物語の第一部から第二部へと、その展開を企てていく物語作者の方法は、実に見事だといわなければならぬ。それは、最初の構想がどうであったとか、成立上の問題がどうであったとか、そういう推測の上の論議を越えて、物語の骨格を領導していく語として、「(御)面影」の語は、きわめて重要な意味と役割とを果していると考へなければならぬ。

「資料 2」で明かなように、「(御)面影」の語は、源氏によつて十四例、全用例の四二・四%と高い百分率で用いられている。しかも、誰を「(御)面影」の語で捉えているかという、その対象を調べると、紫上が十例、三〇・三%という、やはりかなり高い百分率で用いられている。この二人に異常に高い傾斜配分が見られ、しかも、「資料」(2)を考慮すると、この数値はさらに高くなる。

源氏物語第三部、橋姫の巻は、歌語を散りばめて抒情性、情趣豊かな余情的、韻律的な道行文的章段を前半にもつ。「資料」(2)は、その後に続く物語。ただ、この部分は、青表紙本、河内本、別本系陽明文庫本を除く別本系六本は、「校異欄」に示したごとく、「面影」の語を欠く。だが、「資料」(2)東屋の巻の歌は、やはり、この部分と照応して、一つの物語的世界を形成している。物語の対偶的な構成の上からも、諸本に見られるように、この語を存するのが妥当のようには思われる。この間に挿まれた四例は、薫君をめぐる女人大君、中君の心の揺れと、浮舟の登場、その母の思いを描く。ここでも、「資料」(2)東屋の巻は、河内本及び別本系の御物本・保坂本は、「面影」の語を欠いている。このように、「面影」の語の有無は、物語を領導する重要な語彙として、一方では、本文解釈の上で意識的、意図的につくり出されたり、削除されていた物語の享受にかかわる解釈的異文であることを示している。そして、ここでは、浮舟入水の決意と母との関係に、深くかゝる重要な語彙であることを語っている。

「資料」00から09の四例、浮舟の巻の用例は、浮舟と匂宮という関係で一貫し、緊密に一群の物語を構成する。だが、これらの用例は、源氏と紫上との愛の絆の世界を語るという、源氏物語第一部の用語意識とは、かなり違ったものが見られる。浮舟にとって、匂宮の「面影」は、「うたて心憂の身」、「うたてあるまで覚ゆ」、「絶えず悲しくて……いといみじく泣く」という、自らのほかない、つらい宿業を自覚させていく機縁となるものだった。匂宮も浮舟への思いを、「さりとも恋しと思ふらむかしと思しやるにも、物思ひて居たらむさまのみ、面影に見え」という、愛の形で認識しなければならなかった。浮舟と匂宮との間に存在する決定的な愛の不毛と背反の世界を暗示しながら、物語の作者は、大君への形代の愛の意味を、生ける浮舟に対する愛として検証し、語ろうとしているように思われる。『山路の露』も、こういう意味で、物語享受の営みから作り出されていったものと考えなければならぬ。「御」面影」の語を、物語を領導する重要な語彙として捉えてくると、物語の第一部から、第二部、第三部への展開という用語意識のなかに存在しているのは、バラドックスの方法であった。こうした逆説表現の世界の裏側には、複眼的・弁証法的な批判の精神に貫かれ、対偶的な美意識によって物語をつぐみ出そうとする、みずみずしい創作意識が秘められてもいる。

「御」面影」という語の語誌を探りながら、物語作者の用語意識を辿ることによって、物語享受の一つの方法を確立しようとした試論であるけれども、「断章」の域にとどまりはしないかと、ひそかにおそれている。だが、「夢語り」の語にも、物語を領導していく用語意識が見られるように思われ、こうした視座からのアプローチも、また、きわめて有効な物語読みの一つの方法であると考ええる。

第四章 「夕顔の巻疏注」・補遺

一、「源氏物語の本文と享受」要旨・享受をめぐる論

旧著『源氏物語の本文と享受』の「一、夕顔の巻疏注」「二、夕顔の巻の本文と享受」を、八節に分け要約、補訂した。

撫子の女から夕顔の物語りへの道を詳細にたどりながら、紫式部集など多くの作品との関わり、物語享受の相との関わりのなかに、新たな物語的世界の達成を見ようとした。

夕顔の巻論であるとともに、本文系統論へのアプローチでもある。

夕顔と浮舟の物語を、更級日記が対照的に享受している意味を問い直し、そこに、対偶的に構成されている二つの物語の主題を明確にする。源氏物語の愛の世界は、その不信と救い難い宿命とを描いている。浮舟の背負う愛の宿命は、源氏物語の構造や主題に、いかなる意味を持つことになるだろうか。虚構の方法に再検討を加え、愛の無常ともいうべきものの意味を探ろうとする。

源氏物語夕顔の巻の青表紙本、河内本、別本系の陽明文庫本の本文の異同を統計的に処理し、その本文の系統的關係を明らかにしながら、それらの本文の異同が、物語の享受とどのようにかわるかについて論証する。

二、「夕顔」の話型と人物像をめぐる論

帚木の巻の「常夏」の女が夕顔となって再登場する。この「語り」だけが、「女、男、女」という三首仕立ての物語になっている。金田元彦氏は、『大和』や『後撰』に見える古物語の世界を通して『源氏』がつくられてくる枠組を「ひとつの型」として辿ろうとする。

夕顔の巻の「白き扇」を、東屋の舟で浮舟が持っていた「白き扇」と同じように、「班婕妤」の故事をふまえたものと解したのは黒須重彦氏である。紫式部は、『枕』二六七段 三二二段の記述をふまえ、金田氏や黒須氏の指摘するような型や故事をふまえ、撫子から白い扇、男の寵愛を失い、はかない宿世にさすらう、夕顔の女人像をつくり出していった。

三首仕立ての物語が、伝統的に一つの型として持っていた意味を考える。さらに、「伊勢」六九段の章段との関わりを考えていく。そして、「古今六帖」の歌群との関わりも考える。そうしたなかに、一つの「座」のなかで享受されてきた物語の姿を垣間見る。

「心あてに」「寄りてこそ」の歌の解釈に再検討を加え、夕顔をとり殺した「物怪」についても再論する。六条御息所邸にとどまり棲む若い女の妖怪、怨霊が、源氏の心の鬼によって、たぐり寄せられていったものと考ええる。夕顔の巻の物怪を『家集』四四、四五番歌の世界と重ねながら享受し、さらに、葵の巻の六条御息所生霊事件との関わりの中で読んでいくだけでは片手落ちのように思う。『今昔』巻二十七「近江国の生霊、京に来て人を殺しし語第二十」との関わりを見る。葵、若菜下、柏木の巻へと展開していく六条御息所の生霊、怨霊の物語との違いを指摘し、夕顔をとり殺したのが、誰であるかを直接的に表現しないところに、物語の主題論との関わりを見ようとする。

黒須氏によって指摘された中国文学との関わりは、さらに新聞一美氏によって多角的に発掘されている。それらは、発想の基層、始原として見るべきで、それによって、物語的世界の達成を歪めてはならない。

原口文子氏のように、民俗学的研究をふまえ、それを超えようとする方法のなかに、夕顔像を創出する一つの原像、発想の原点を読みとっていくことも大切である。長塚杏子氏、今井源衛氏の新しい指摘などもふまえ、主題論への展望を試みた。

三、「おのがいとめでたし」と再論

今井源衛氏編『源氏物語とその周縁』（和泉書院）の今井氏の「「おのがいとめでたし」と考」に答えたもの。やはり、従い難いことを論証しようとした。平成1・10・22・愛知淑徳短期大学における中古文学会で発表した。菊田茂男氏は、「中古文学会秋季大会において、岩下光雄氏から異見、「おのがいとめでたし」と再論」が示されたが、結論は先に持

ち越されそうである」(『国文学』学燈社 平成2年1月号「学界時評」152頁)と指摘されている。

四、「つれづれ」の語をめぐる論

「つれづれ」の語をめぐる論」は、「つれづれ」の語が文学作品や芸術作品の創造や享受の場と深く関わる意識を持っていたことを辿り、『源氏』の和歌の世界に秘められた意味を読みとろうとした。

第五章 宿木の巻疏注

——「心ときめき」「顕証」などの語をめぐる論

「心ときめき」、「顕証」、「また」「掲焉」などの用例や、「∧こそ∨已然形」の強調逆接法の語法を通して、その背後に潜む用語意識、用法上の意識などを辿り、物語享受の問題に検討を加えた。巻論の始原として「いとけしきある深山木」の「けしきある」語をめぐる、現代の「源氏学」が、大きな錯誤をおかしていることを指摘する。更に「夕顔」論から「浮舟」論への展望を試みる。

第六章 『伊勢物語』の方法と『源氏物語』の享受

——第一段・第二段をめぐる論——

『伊勢』第一段・第二段を関連作品の和歌・詞書きや地の文の表現する意味成分の順序という視点から構成論的に捉え、諸説を整理して、成立論上の問題をふまえながら歌の解釈を試みた。さらに、疎外された孤独な「昔男」の生きる

世界と女の世界との二重の構造化を捉え、「思いなす」の語に、居直りの逆説的心理が、裏側に隠されていたことを読みとろうとした。『伊勢』の章段の対偶的構成が、『源氏』の対偶的美意識とどう関わるか、主題論としてはどうか、という問題をも明確にしようとする。

巻末に次の跋文・略歴を付す。

自から還暦を祝って論文集を出すというのも、考えてみればおかしなことである。たいがいは同学の方や教え子が寄稿してくれたものを編み、略歴や著作目録などを添えるということになっている。ましてや、死後のことまで沙汰し置いて、どうやら戒名めいたものさえ作ってしまったという手まわしのよさも、あきれ果てたことかも知れぬ。精いっぱい生きていたので、現世に執着したり、残す未練などいささかもないのかも知れない。翁自からがまかり出でて、「おい、さり、さり」というのも、「信濃源氏」の照れ隠しの口上なのかも知れぬ。野武士とか、反骨とかいうことばが好きで、そういう生き方に生の情念を燃やした時もあった。

人の生き方に、気負いが無いといえは嘘にならう。青春のある時期に、義憤のようなものを感じることがなかったならば、私は、平凡な教師として、平坦な道を、だらだらと歩いていたのかも知れぬ。『源氏』にとり憑かれ、怨念のほむらのなかで読み耽った、すき者の『源氏』の世界のように思われてならないが、三谷栄一、森一郎、吉岡曠、室伏信助諸先生をはじめ、多くの先学のご教示に導かれ、どうやら六十の馬齢の坂をとぼとぼと越えることになった。ただ学恩にお報いしたいという思いが痛切である。

いくばくか。無常の現世に、生きる限りの日は定め難い。だが、やはり『源氏』への熱き思いに燃えながら、ひとりひとりの学生を大切に育てていきたい。それに、地域に根ざす開かれた短大としての使命を負うて生きなければならぬ。

それが恩頼にお報いする道かとも考え、いい仕事を続けたいと思う。

略 歴

昭和 七年（一九三二） 十二月十二日、長野県塩尻市北小野（旧筑摩地村）に生まれる。

昭和 二十年（一九四五） 四月、松本第二中学校に入学。

昭和二十六年（一九五一）三月、学制改革によって高等学校となった松本県ヶ丘高等学校を卒業。文芸雑誌「道程」創刊、「日本文学への一試論」発表。「県陵新聞」の短篇小説募集に応募「浮雲」佳作となり新聞に掲載。この頃、作家への道を夢みる。石田康弘先生校閲『概説国文学史』の出版により、生徒会功労賞。洗馬村「長興寺」での折口信夫博士の『源氏物語』須磨、明石の巻の講読を聞き、深く感動。

四月、国学院大学文学部に入学。武田祐吉・佐藤謙三教授研究室（文学第三）に入り、万葉集・源氏物語の研究について指導を受ける。三矢正旦氏のお力添えによる。

昭和 三十年（一九五五） 三月、同大文学部卒業。

四月、武田先生の推薦によって神奈川県私立相洋中・高等学校教諭。大森栄・山田石男先生のお力添えによる就職先を辞退。『源氏物語の形態』（武田祐吉先生序）によって学園理事長から褒賞状、金一封。高橋正治校長の知遇を得る。ひそかに反骨の思いを胸に、学問、教育への情熱に燃える。

国学院大学国語国文学会に数次に亘り研究発表。その度に私家版として研究論文集を上梓。

昭和三十三年（一九五八）三月、小野幸世と結婚。

昭和三十六年（一九六一）三月、相洋中・高等学校を退職。

四月、長野県木曾東高等学校教諭。山田石男先生のお力添えによる。

三谷栄一先生の知遇を得る。

昭和三十九年（一九六四）四月、長野県諏訪二葉高等学校教諭。

昭和四十年（一九六五）四月、長野県諏訪清陵高等学校教諭。伊沢集治校長と対立。『源氏物語論』（佐紀社）出版。

福沢武一、山本綱規、荻原時男先生らと「諏訪国文学会」創設。数次に亘り三谷栄一、森一郎、片桐洋一、吉岡曠、上条彰次、室伏信助、中村啓信先生を招き講演会。自からも研究を発表。

昭和四十三年（一九六八）四月、長野県松本県ヶ丘高等学校教諭。山田石男校長、川上栄昌教頭、上条勲校長の知遇を得る。『平安時代物語論』（黒田優子と共著、佐紀社）出版。

昭和五十三年（一九七八）四月、長野県伊那北高等学校教諭。三浦宏校長、丸林一富教頭の知遇を得る。

昭和五十五年（一九八〇）六月、『源氏物語とその周辺』（伊那毎日新聞社）によって、武田祐吉博士記念賞。

昭和五十八年（一九八三）三月、伊那北高等学校を退職。

四月、信州豊南女子短期大学開学に伴い国文科専任講師。

昭和五十九年（一九八四）四月、平沢武男校長の招きによって六十三年三月まで、松本大学予備校非常勤講師。平沢先生逝去。高等学校在職中から関与していた河合塾東大入試オープンの採点業務等も辞退。

昭和六十一年（一九八七）十月、『源氏物語の本文と享受』（和泉書院）出版。

十二月、助教授。

昭和六十二年（一九八八）六月、『首書源氏物語 玉鬘』（和泉書院）出版。この間、学生部長、教務委員長、進路指導委員長。

平成 四年（一九九二）四月、教授。入試委員長。

十二月、還暦記念論文集『源氏物語「本文と享受の方法」』（和泉書院）出版。祭林寺住職を敬愛、葬儀は神仏混交祭により、岩下家代々の奥津城に葬ることを指示。「釈秋翠艶笑院岩光雄翁」。（A5上製函入・八七七五円）